

# 海と列島文化

大内建彦

## 1. 日本列島の地理的環境

改めて言うまでもないことだが、この日本の列島はアジアの極東に位置している。しかも四囲を海でかこまれており、こうしたロケーションが歴史的には幸いし、列島内に古代国家の成立来今日に至るまで、列島の一部を除き、「外部」という異国による決定的な支配や侵略を許して来はしなかった、とは一応現象的にはいう。その好個の一徴証として、十三世紀の鎌倉時代末期、日本に対する属国支配の意志をもって北九州に来攻した元軍が、二度にわたって暴風雨に阻まれて撤退を余儀なくされた、いわゆる元寇と称される一著名事変を挙げてみてもよい。この歴史上よく知られた事実が、東シナ海の台風圏に属する「島国」日本の、それゆえにもちえた好運を明証しているかに見える。しかし、この好運がたまたま自国の側に有利に働いた偶発的な自然現象がもたらした結果でしかなかったことは、はるか後年、皮肉なことにその立場を全く逆にして、この「島国」日本が朝鮮半島を足がかりに大陸から南洋諸島までも併合せんとし、大東亜共栄圏なる名のもとに帝国主義的国家建設を野望するに至ったことの一事をもって了解されよう。こうしたことを併せ考えれば、強大な隣国たる中国帝国から永年日本の列島が併呑をのがれてきた現実の方こそ、はるかに奇異で好運なめぐりあわせとでも再認識すべきであろう。かの元軍による侵攻を未然に防ぎえたのも、ひとえに元の水軍が進攻時期を誤るという戦略上の単純ミスによるものと断すべきであろう。実際、少々期日がずれるか、一つ戦略が違っていてもしたら、事情は大いに異り、日本の命運を分ける深刻な事態が生じたことも大いにありえたことと思える。

そうしたことから、折よく吹き荒れたこの暴風を神風と称して、この一事変が「神国」日本（初出は神功皇后紀の新羅征討の条）という神国思想を高揚させる上で、一大契機となったことはよく知られていよう。以後、異国という外部との遭遇をめぐって、その度ごとに自己規定的にいかにもいわくありげに、神明の加護を必定にする「神国」日本という言説＝物語が再生産され拡大普及してゆくこととなった。さらに近代天皇制国家においても、「神国」日本思想は、「外部」との

葛藤の過程で、それらに抗するために、全体主義的な内を堅める心情をおおるものとして大いに利用宣揚された。いわば国家意志を集約するイデオロギッシュな観念装置として機能したのである。そして同時にそれは万世一系の天皇を戴く民族全体のアイデンティティの拠りどころともなり、巨大な物語をくり返し紡ぎ出し流通しつづけてきたことは銘記されておいてよい。

こうした歴史的展開やその経過に見え隠れして強固に潜在しつづける「島国」＝「神国」観は、文字どおり神話的に虚構としてつくり出されてきたがゆえに、今日においてもなお、たえず空虚の中心に忍び込み、新しい物語を再生しつづけている。戦後歴史学にひきつけていえば、「神国」日本的観念は、過度に閉鎖的で単線的ないわゆる鎖国史観を胚胎させる土壌ともなっている。こうした歴史像はいわば、歴史の実相からかけ離れて、特殊にして神聖な歴史空間や価値体系をアブリオリに指定し、それに基づいて手もちの史実で肉づけして描きあげられた、また別の一つの物語としかいいようのないものだ。日本中世史家黒田俊雄が「島国的日本歴史像」と批判してやまないものだが、それが異国排除の論理と一対の特権的な「神国」的観念に支えられた虚妄な歴史像にすぎないことはいうまでもないであろう。

戦後歴史学にして、未だ克服しきれずにいる観念的呪縛とは何なのか。そしてその盲点をつきくずす視角はどのようにして得られるものなのか。そうした難問をとく最大のカギの一つは、私たちが海に対して抱くイメージそのものの中に存在する。私たちが海に対して描くイメージの貧困さにこそその難問をとくヒントが隠されている。そもそも島を構成する海そのもののもつ重要な機能とその役割について私たちは余りにも無知なのだ。そしてそれらが歴史的時間の中でいかに決定的に変容してしまったかについて思いを馳せようとしめない。世界史上における地中海文明の歴史的推移を想起するまでもなく、過去の文明史や国家史において、海の果たしてきた役割の大きさについては改めて注目されてよい。とくに比較的航行に安全な内海は、古くからスムーズな人的物的量的移動を可能にする絶好の交通の舞台となった。そして、その内海に点在する寄港地は、常に新しい情報や文物の流通する拠点となり、国際都市としての性格を強く帯びる。そうした交流・交易によって作りあげられた国際間の内海ネットワークは、常に国家に新しい情報や富をもたらし、あるいは又その権力空間にたえず緊張感を与

え、それを活性化しつづけるところともなった。本来航行に利便な内海は、このように国際政治の舞台として機能し、そこに点在する拠点としての港は、新しい国家や政治を演出する前線基地としての役目をも果たした。わが東洋史家宮崎市定に「瀬戸内海国家」という、「地中海国家」のミニチュア版ともいうべきユニークな古代国家への視角があるが、それというのも彼が、日本の古代国家にとって海彼との交通をも含めて、瀬戸内海が畿内と吉備と北九州を結ぶ幹線道路として機能し、海上交通の要を担っていたことに早くから着目していたがために他ならない。ここで想起しておきたいのは、偉大な歴史家石母田正の「国家機構の萌芽」は「諸国間の境界領域の場にまず成立する」とみるあの高名な定式である。石母田は更に、「朝鮮海峡は、朝鮮半島・大陸から倭国を隔絶する役割よりも、反対に両者を結合させ、媒介する通路をなしており、そこに点在する大小の島々は、古典古代の成立期における多島海と同じ役割をはたした」とし、すでに海の役割ならびに大宰府の性格についての的確な認識が示されていた（網野善彦）。

ところで、そうした文化の伝播や移動という観点に切り込むために、改めて日本の列島の東アジアの国際環境の中におかれている位置に目を転じてみよう。常日頃私たちは方位としての東西南北を無視した、関東・関西二極をほぼ中心にすえた日本地図像にみなれている。当然のことながら隣接諸国との位置関係についても十分なかつ正確な知識をもちえていない。そうした私たちの頭の中に居すわりつづける列島像からしばしはなれて、日本の列島が真北にくるように中国大陆を真南側に位置させ、その丁度中央あたりに突起物のような朝鮮半島がくような具合に東アジアの地図をおいてみるとよい。そうすれば、日本列島を中心に、東西に長くつづく列島が西は樺太から東は沖縄南西諸島を経て台湾へと、中国大陆の北縁にへばりつくように弓状に長く弧を広げている姿が目に入るであろう。これらの長く点在する列島群が太平洋を防波堤のごとく限って、その内側に抱き込まれた内海は、朝鮮半島を中じきりに環日本海域と環シナ海域とに大きく二分されて広がっている。この大きな二つの多島海地域は、先にあげた地中海と同じように、そこに内在する島々や国々にとって、自然そのままに、格好の交通・交易の中庭となっているのだ。こうした東アジア的世界の構図の中で、その中心たる中国帝国からたえずくり出される政治力が、諸民族・諸国家間にそれぞれ独自の政治秩序をもたらし、海という界域の上に広く、インターナショナルな緊張を

はらんだ政治空間を現出させた。この海というファクターを介する国際的な政治空間とその内的構造をぬきにして、そもそも日本の歴史の形成や展開を考えることはできないのだ。こうした海と交通という一つの基軸をとり込んだ史的見地からいえば、おそらく神風の吹いた中世以来、いや江戸の鎖国以来、日本人にとって海のイメージは自由で豊かな交通の場から、外国に対する強固な防波堤なるものへと大きく変ぼうしたと思える。海を国境とみる固定的観念とその習慣が、海が現実にくりひろげている豊かな交流の実態を益々みえにくいものとしてきた。加えて、私たちはモダンな国民国家観念に安易によりかかり、そうした国境観や領域観をもとに、それを過去に投影させて歴史を理解するという通弊から自由になれない。こうして出来あがるのが、「神国」日本観とも通底する、結果として外部を隠蔽して描かれることになる「島国的日本歴史像」なのである。

いずれにせよ、そうした陥穽から脱却し、より豊かな歴史像を構築する意味でも、叙上のような矮小化されたそれではなく、海がこれまでに果たしてきた役割の大きさを再認識する必要がある。そして海を媒介にした、日本の歴史を貫く東アジアの共時的磁場というマクロな視野へと、歴史の思考をおし広げてゆかなければならない。そしてそこに展開されてきた諸民族間の接触交流による多元的かつ複合的で豊かな歴史の全体性＝共有性こそが追究されなければならないものだ。そこに可視化されるインターナショナルな共時的歴史こそが、排他的でリニユアルな固有の歴史という物語を断ち切る武器となるべきものだと思う。

よく知られた公的な遣隋使や遣唐使それに渤海使などのみならず、それよりはるか以前から環日本海域・環シナ海域は倭人たちにとって公私をとわず、様々な交易・交流を許容する自由な開かれた天地としてあった。こうした中での交通のくり返しとそれによる情報の蓄積が、それぞれの民族の国家や文化への自立の意識を目ばえさせたのだ。時代をさかのぼればさかのぼるほど、当初より海を境界とする地理的環境が、大陸や半島の国々に対して、一定の自立的立場をとることを保証してくれたわけでは勿論なく、ましてや相対化した位置をキープして対等かつ友好的な外交関係を維持しえてきたわけでも当然ない。少なくとも古代という時代に限って言えば、そうした安易な現実認識や想定は根本的に誤っていると思える。大まかに言って、日本の古代は海の彼方の中国大陆を常に念頭におき、そこからもたらされる過剰なまでの政治の力学や文化や社会の動向に絶えず対応

し反応する中で、国家の形成を促されその史的展開をきり拓いてきたのだといえる。改めてここで、海が国家に関わりながら果してきた役割の大きさを喚起しつつ、そうした海を一つの基軸とした視角や評価を欠いた古代史や古代文化史へのアプローチは、そもそも成り立ち難いことを指摘しておきたい。

## 2. 日本列島の歴史的環境

海とその内外の交通について、いろいろくたぐたく述べたてきたが以上を要するに、海にかこまれた列島によって形成される日本という国家は、いかに逆説的にきこえようが、それゆえにこそ、「島国的日本歴史像」として描かれたりしてはならないのだということであった。この自由な海という場を介した海彼との緊密な交通の問題をぬきにして国家というものを語りえないし実際、そうした観点への留意を欠くことは、日本国家史の解明に有効な視角を、決定的に見失うことにさえる。切言すれば、開かれた海を閑却に付することは、再び「島国的日本歴史像」をなぞり、又一个の空虚な物語を語る（騙る）はめに陥る。それは結果として事実に対応した歴史を隠蔽することにつながるのだということを強調しておきたい。

さて、ここで時代を古代律令国家の成立期に問題を絞って、上に述べたような事実をより詳しく検討してみよう。今日の多くの教科書などで描かれる古代史像がそうであるように、大むね自律的にかつ内的に段階的發展を経て、近代的な律令国家として脱化するに至るというように、同質的な時空間を軸に自己完結系として描かれる傾向がつよい。つまり対外関係において、久しく自立的相対的立場を堅持しつつ、段階的成熟をとげていったかのような歴史叙述がいまだに根強くみられる。こうした見方は、歴史を単一的な事実の反復とみ、「外部」を予め排除した上で、想定される一つの螺旋的な發展段階論的モデルの下に図式化し、帰納的に歴史を理解しようとするほとんど机上の空論でしかない。又、そうせざるを得ないほど、国家の黎明期を語ることはむずかしい。加えて、前節でも触れたように、私たちの国民国家的な鎖国史観的なものの見方は、はるか昔の古代の歴史の実相を豊かに再現する上で、方法以前の決定的なアキレス腱ともなっている。こうした諸事情の積み重なりの上に織りなされた歴史が、その生成の実相から大きくかけはなれたものとならざるをえないこともむしろ当然とさえ思える。

ところで、国家とは自然発生的なものでも自律發展的なものでもなく、人為的

所産であり他律的構築的なものである。国家が一応近代的な自律的な武装国家として成立し且つ、対外的に平和な状態にあっても、「外部」との横断的な交流の問題、すなわち絶えざる外部との間に生み出される葛藤や緊張関係をぬきにして国家というものの実際的な存立のあり方を促えることは不可能であろう。とりあえず国家とは、「外部」つまり異国や異族を意識しあい、相互に緊迫感を生ぜしめる目にみえぬ力関係そのものによって成り立っていると言っている。そこにはらまれた「外部」との緊張関係が損なわれれば、たちどころに内部崩壊せざるをえないような何かこそが国家であると言える。

さて、西暦三世紀ごろ、この列島の古代国家の黎明期、ヤマトの盆地に突如巨大な古墳が出現する時を同じくして、日本の列島の一部が国家の統一に目ざめはじめ、そのための新しい権力システムが、「外部」に目をむけて模索されはじめた。地域国家間の内的矛盾を超克し、自己の社会構造の変革とその活性化を図るためにも、政治力ある権力体制を創出することが急務であった。このヤマトの王権といういわばインターナショナルな本格的な権力装置の誕生に一役かったのが、東洋史家西嶋定生の提起した、いわゆる中国の世界帝国システムの一環としての冊封体制論である。この冊封システムに組み込まれたヤマトの王権は強大なパワーポリティックスを派生させ、その成長を急速に促されつつも、そこに一定の統制をも加えられることになった。この冊封体制とは、辞書の意味でいえば、「東アジア諸国の国際秩序を形成するためにとられた前近代的な対外政策」であって、「中国王朝の皇帝が周辺諸国の君長に官号・爵位を与えて君臣関係を結び、宗主国対藩属国という立場で、これを従属的な地位におく」（『国史大辞典』）政策のことである。

その西嶋の説くように、中国の史書に「親魏倭王」に封ぜられたと見えるいわゆる邪馬台国の女王ヒミコの時代の少くとも三世紀末、しきりと中国に朝貢してその冊封をうけた五世紀のいわゆる「倭の五王」の時代、とりわけ「画期としての雄略朝（＝倭王武）」（岸俊男）を中心に、ヤマトの王権は（国家名称としての日本はまだ成立していない）中国王朝側のとる冊封という外交関係下の世界秩序に組み込まれる形で成立している。普通、通史的にはつづく六世紀に入るとヤマト王権は中国とのこうした冊封関係から離脱し、相対的に自立した立場を模索しはじめると説かれることが多い。しかしこれより以降の隋、唐帝国に対して公的

に派遣された遣隋・遣唐使についても、それらを広義の意味で冊封体制に準ずる制度的使節とみなし、冊封体制が依然つづいていたとする見解もあって、必ずしもそうした体制から離脱したとはいききれない側面もある。又、時代がはるかに下るが、室町期、足利義満は国交打開の道を求めて明に使いを遣り、明と冊封関係を結ぶが、その折、正式に明皇帝から日本国王に封ぜられたという歴史的事実もある。従って、冊封体制からの脱却を国家の発展的諸段階と短絡的に結びつけて考えることは再考を要するし、この明との冊封関係と五世紀までのそれとを同列に論じることができないことも又自明である。ともあれ、ここでは、日本古代国家の成立が中国の冊封体制を媒介に動機づけられ、継起始動したのだということを確認できさえすればよい。

さて、こうした古代史的事実に照らして言えば、上述のように三世紀来、ちょうど八世紀の交の最終的な日本の古代律令国家成立にいたるまでの過程は、日本古代史家山尾幸久のいうように、中国の冊封体制を大きな軸に古代東アジア諸国、諸民族との長期にわたる絶えざる交通接触によって媒介され、段階的な成熟を遂げたものとみるべきことを示唆している。山尾によれば、ヤマトの王権も日本という国家も民族も、いずれも中国帝国を中心とする古代東アジアの政治構造の中で、東アジア諸民族間の相互の外的接触によって将来された所産だということになる。その集約的表象たるものが、七世紀末の日本列島における国家主権としての天皇体制の成立であるとみるのである。

この山尾の東アジアの国際政治の動向に対応させて導き出された、いわゆるヤマト王権の順調な「段階的な成熟」を、別の角度から傍証補強してくれるものとして次のような見解もある。考古学者白石太一郎の所説によれば、三世紀後半から七世紀後半にかけての日本の列島は巨大な墳丘をもつ古墳づくりに熱中した特異な時代だという。その間、古代のヤマトの王権は、初期ヤマト政権からヤマト王権へと、首長連合的なものから世襲王権的なものへと、王権の内実は大きく変化するものの、おおづかみにいって、三世紀末から六世紀後半の巨大な前方後円墳の出現から衰退に至るまでのその隆替におよそ即応して、古墳自体にしてもその造営に反映している政治的秩序にしても、総じてスムーズに継続していて断絶がみられないという。そうした中で、前方後円墳を中心に、そこに認められる古墳の規模・形態差は、それぞれの時期における初期ヤマト政権内ないしはヤマト

王権下における一定の政治的地位・身分を表示するものだという。同じく考古学者の都出比呂志も類似の見解をとっている。彼によれば、前方後円墳が飛躍的に巨大化する三世紀後半以降、それはヤマトの政治中枢と地域首長との関係を示す政治的記念物となったとし、この事実はヤマトの王権下に各地の首長層を序列化する政治的秩序が確立したとと平行であるとする。そしてつづく四・五世紀に、この巨大古墳をめぐって各地の首長どうしを序列づけてその政治的身分を古墳の形式と規模とによって表現する原理を、九州から東北までの日本の列島のほぼ全域に拡大適用してそれを貫徹したと見ている。すなわち全国的な統一王権の王権そのものが古墳の規模・形態の規制を内包させていたとみる、いわゆる前方後円墳体制論である。二人の考古学者の指摘があるように、宗教的なものによって支えられている墓制に、共通する一定の規矩があり、それに則って巨大古墳がなだらかな盛衰の様相を示すという事実は、いうまでもなく、前節で述べた外部を排除した単相的な発展史観とは全くちがった意味で、政治的社会的秩序に根本的な変革がみられなかったとの想定を許容しよう。先の山尾幸久の指摘とも絡めていえば、この日本列島の古代国家形成史にみられるきわめて順調な発展的展開は、海彼からもたらされる絶えざる情報が国家にとっては好ましい緊張感を生み、社会や文化にとってはその活性化を生み出すエネルギー源として役立ったことによっていると理解することができる。こうした事実を確認するだけでも、いわゆる「騎馬民族征服王朝説」（江上波夫）や「王朝交替説」（水野祐）などの仮説の自らもつ限界性も容易に知られよう。加えて、四世紀半ばから六世紀の半ばまでのほぼ二百年間、ヤマト王権が朝鮮半島の南部を直接支配し、百済と新羅の王を従属させていたとする『日本書紀』の歴史記述は、その記述そのものの虚構性を自ら露呈するものであろう。詳細な言及はさけたいが、もし仮にそうした事実がありえたとすれば、少なくとも王権はいうに及ばず、国家のシステムそのものに今のままではありえない不可避の重大な変化や断絶が見られたであろう。

ところで、ほぼ日常的なまでに政治抗争にあげられる朝鮮半島の情勢に比して、この日本列島が、六世紀後半の九州磐井の反乱や七世紀後半の白村江の戦など、度々の国内的危機を孕みつつも、国家形成史的にみれば総じて、順調な段階的成熟の様相を示したのは、上でみてきたような国際関係上の理由のみによるものか。それは恐らく、歴史とともに始まるこの列島の大陸文化の受容構造その



ものに深く根ざすものに相違ない。というのも、この日本列島が国家や社会に目ざめはじめ、そうした社会のシステムを支え、それを構成する人々の規範や紐帯となる文字、法律、宗教、貨幣、技術などを必要としはじめた時、それらは免れがたく中国の国家・社会・文化のそれへ、漢字文化圏・仏教・儒教・道教文化圏のそれへ目ざめることを意味した。より正確に言えば、この列島が漢字という文字を媒介にした中国という異族の政治や経済や文化などと出会い、それらに触れた時はじめて、この日本の列島は日本という国家を目ざして、自覚的に積極的にそうしてものを摂取する方向へと促されたというべきであろう。

ところが、日本の列島にとって、中国文化という異文化の受容はそう生やさしいものとはならなかった。それというのも、受容対象としての文化自体がすでに完成の域に達した高度なものでありすぎたために、いわば形式内容を問わずそのあるもの全てを丸ごと受容することを宿命づけられたからである。もしこの列島の異文化受容に特殊日本的な構造があるとすれば、おそらくこの丸呑みという受容の形態と無関係ではありえないと思える。上でも触れたように、この列島の大陸文化の受容が中国の冊封体制を直接媒介とするものであって、そうした意味でも国家形成と異文化受容が表裏一体の不可分のものであり、これら二つのものが組み合わさった国家・文化システムが、同時並行的に相補的に折り合いをつけて達成される過程で、文化受容の基本的構造ができあがってしまったものと思える。そして、このいささか盲目的かつ性急にすぎる異文化受容のあり方は、海を介する衛星国に絶えず神経症的な摂取を強制し、常時それが国家・文化の中核・基層を揺さぶりつづけるという構造をつくり上げるに至った。その結果もたらされた政治的にも文化的にも、外圧というベクトルが内圧をくるんで端に追いやるように作用する政治や文化の日本式翻訳構造は、政治や文化レベルの決定的な差異のもたらしたものとはいえ、中国帝国の永遠の近隣衛星国としての海国日本の、余りにも宿命的ともいうべき構図を象徴していよう。このように古代日本の国家形成史に限っていても、海は緩衝帯として一応の歴史の閉鎖系を保たせつつも、それ以上に、外に向って無限に開かれた海は常時文化の伝播を仲介し、古代国家や文化の深部のシステムそのものを揺さぶり変革を強いる機能を果しつつけたのだといえる。